

### 3 幼児期の子どもを持つ父親の父性行動に関する要因の分析

高知女子大学	山崎 美恵子( 5 回生)
高知女子大学	中野 綾美( 27 回生)
高知女子大学	○益 守 かつき( 33 回生)
高知女子大学保育短期大学部	宮 上 多加子( 26 回生)

#### I はじめに

近年、家父長制度の崩壊や産業構造の変化により、家族形態は、拡大家族から核家族へと移行し、父親が単身赴任をしている家族も増加している。また、女性の就業率が上昇し、結婚後も母親が仕事を続けるようになったことから、従来母親の仕事とされてきた育児に父親も参加することが期待されている。このような現状の中で、父親は、子どもに対してどのような役割を果たしそしてその役割を果たすためにどのような行動(父性行動)をとっているのだろうか。ウイニコットは、父親は母親が心身ともに快適に過ごせるように援助し、道徳的にも支え父親の持っている肯定的な特質や他の男性とは一味違う何かを子どもに示すという役割を担っていると論じている。我が国においても、父親の役割や育児参加の状況、子どもとの接し方、父親像という視点から、いくつかの研究が行なわれている。しかし、父親が役割を遂行するためにとって父性行動を包括的にとらえ、さらに父性行動に影響をおよぼしている要因について明らかにしている研究はみあたらなかった。社会性が芽生え、道徳律を学んでいく幼児期に父親が子どもとどのように関わるかは、その後の子どもの成長発達に大きく影響すると思われる。そこで、幼児期の子どもを父親を対象に、①父親の父性行動をどの程度行なっているかを明らかにする、②父性行動に影響している要因を明らかにすることを目的として調査を行なった。父親の父性行動の実態と影響要因について、若干の知見を得たので報告する。

#### II 研究方法

高知市内の5カ所の保育所に通園している3歳～6歳の子どもを持つ父親456名を対象に、研究者が独自に作成した質問紙を用いて調査をおこなった。質問紙は、協力の得られた保育園に配布し、対象となる父親に配布していただき郵送法により回収をおこなった。

質問紙の内容は、対象者の背景および父性行動に影響を及ぼすと考えられる要因(子どもの特性、家族構造、生活時間、父親になる準備性、父親像)に関する24項目と父性行動に関する35項目(5段階評価)からなっている。尚、本研究では父性行動を、父親が役割を遂行するために行う行動で、社会化行動、性別役割行動、保護行動、養護行動、妻への実質的支援行動、妻への精

神的支援行動、リーダーシップ行動からなると捉えている。(図1参照)。

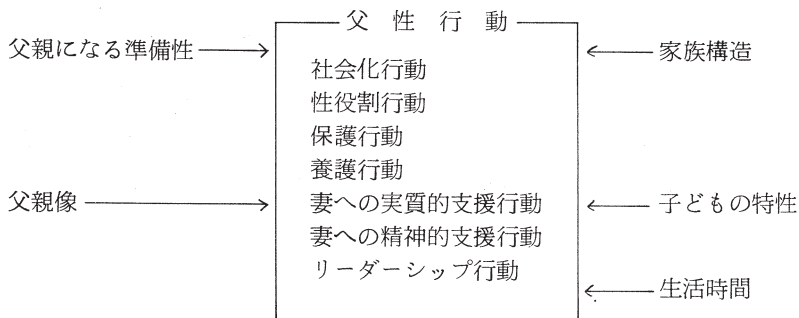


図1. 父性行動に関する要因図

データ収集は、1992年6月4日～6月30日に実施した。

分析方法は、統計パッケージHARUBOWを用いて、基本統計量・度数を算出し、要因については、一元配置分散分析を行った。

### Ⅲ 結果および考察

#### 1) 対象者の背景

回収率は69%、314名の対象者から回答が得られた。対象者の年齢構成は、30歳代の父親が約6割を占めていた。仕事の時間帯は、「昼間一定時間自宅外で勤務している」62.6%、ついで「早朝から、又は夜遅くまで、自宅外で勤務している(例：農業、漁業、営業)」17.7%、「不規則に自宅外で勤務している(例：三交代など)」10.0%、「自宅内で自営業などの仕事をしている」5.5%、「その他」4.2%であり、仕事の時間帯が規則的な父親は約6割であった。休日については、日曜日を含む休日が76.3%で最も多く、次いで土曜日・日曜日を含む休日19.7%、平日のみ3.0%、不規則0.7%、休日なし0.3%であった。約9割の父親が、子どもと日曜日を過ごすことができていた。家族形態については、同居20.9%、核家族78.5%、その他0.6%で、核家族が約8割を占めていた。対象者の子どもの数は、平均2.2名、子どもの平均年齢は、4.4歳、男の子55.3%、女の子44.7%であった。生育歴における子どもとの関わり経験については、あると回答した父親は39.7%、ないと回答した父親は60.3%であり、子どもとの関わり経験のない父親が多いことがわかる。父親の子どもとの最初の対面は、出生後1時間以内が59.2%で最も多く、出生後12時間以内25.4%、出生後1日以内5.5%、立会い分娩4.8%、出生後3日以後3.2%、出生後3日以内1.9%であった。立会い分娩を含めると64%の父親が1時間以内に子どもと対面しており、これは、男性が子どもの誕生を妻との共同作業として捉えている現れだと考えられる。子どもの誕生し

た後の夫婦関係は、変わらない57.3%、深まった37.1%、距離ができた5.6%であった。

## 2) 父親が子どもと過ごしている時間

父親が実際に子どもとどのくらい過ごしているかは、平日では、3時間以上が一番多く28.2%、1時間以上2時間未満が23.1%、2時間以上3時間未満が22.1%、1時間未満が18.9%、なしが7.7%であった。これに対して、休日では、3時間以上が73.8%を占めていた。一方、父親が子どもとどのくらい過ごしたいと思っているのかは、平日では、3時間以上が47.4%、2時間以上3時間未満が24.6%、時間以上2時間未満が20.8%、1時間未満が4.8%、なしが2.4%であった。休日では、3時間以上が79.8%、2時間以上3時間未満が9.1%、1時間以上2時間未満が7.7%、1時間未満が1.7%、なしが1.7%であった。相対的に見て、平日には、約50%の父親が子どもと3時間以上一緒に過ごしたいと希望しているにもかかわらず、実際は過ごせていないが、休日には希望時間一緒に過ごすことができているといえる。

## 3) 対象者が抱いている父親像について

①自分の父親に対して抱いている父親像、②理想とする父親像、③妻が期待していると思う父親像、④父親としての自己像という4つの視点から、それぞれ、「威厳があり、近寄りたがたい父親：威厳タイプ」「普段から自分の意見を言い、どちらかと言えば、自分の思い通りにすることが多い父親：傲慢タイプ」「家族思いで、優しく、頼りがいのある父親：抱擁タイプ」「大らかで物分かりが良く、どちらかと言えば、子どもの意志を尊重してくれる父親：子どもの意志尊重タイプ」「何でも話せて、いろいろなことを一緒にやるなど友達のような父親：友達タイプ」「仕事などのために家族、特に子どもとの関りが比較的少ない父親：疎遠タイプ」かを尋ねた。自分の父親に対して抱いている父親像については、「疎遠タイプ」30.7%、「傲慢タイプ」21.6%、「威厳タイプ」20.9%、「抱擁タイプ」14.3%、「子どもの意志尊重タイプ」8.0%、「友達タイプ」3.1%であった（図2参照）。理想とする父親像について

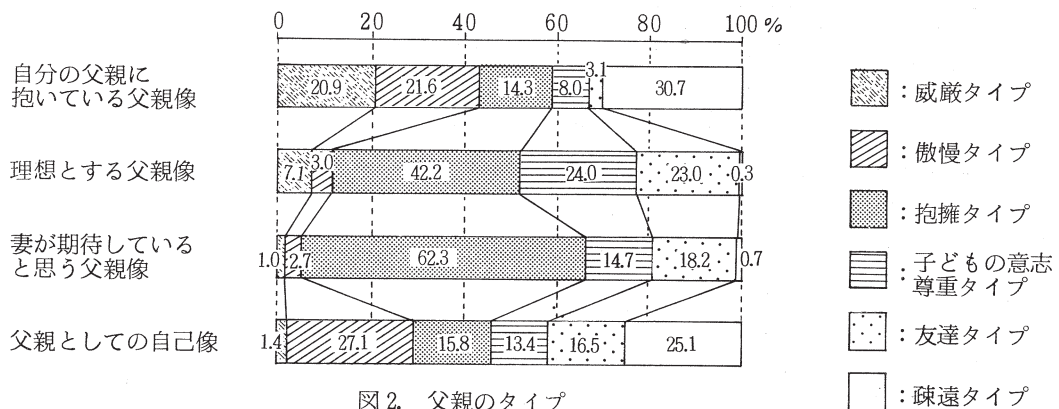


図2. 父親のタイプ

は、「抱擁タイプ」42.2%、「子どもの意志尊重タイプ」24.0%、「友達タイプ」23.0%、「威厳タイプ」7.1%、「傲慢タイプ」3.0%、「疎遠タイプ」0.3%であった(図2参照)。この2つの父親像を比較すると、約9割の父親が自分が父親に対して抱いている父親像とは異なる「抱擁タイプ」「子どもの意志尊重タイプ」「友達タイプ」の父親像を理想としていることがわかる。戦後産業構造が変化し、父親は家庭の外で仕事をするようになり「時々家庭内のことに顔を出すお客様のような人」とされた時代から、「家庭内暴力・不登校な子どもの問題から父親不在がクローズアップされた時代」をへて、家族思いで子どもの意志を尊重し友達のような父親を理想とする父親が増えているのではないかと考えられる。妻が期待していると思う父親像については、「抱擁タイプ」62.3%、「友達タイプ」18.2%、「子どもの意志尊重タイプ」14.7%、「傲慢タイプ」2.7%、「威厳タイプ」1.0%、「疎遠タイプ」0.7%であった(図2参照)。父親としての自己像については、「傲慢タイプ」27.1%、「疎遠タイプ」25.1%、「友達タイプ」16.5%、「抱擁タイプ」15.8%、「子どもの意志尊重タイプ」13.4%、「威厳タイプ」1.4%であった(図2参照)。理想としている父親像と妻に期待されていると思う父親像と実際の自分に対して抱いている父親像との間にはズレが認められた。

#### 4) 父性行動

対象者のとっていた父性行動の平均得点は、総合平均得点(35-175点)101.12、社会化行動(5-25点)16.36、保護行動(5-25点)16.08、リーダーシップ行動(5-25点)15.08、妻への精神的支援行動(5-25点)14.67、性役割行動(5-25点)14.35、養護行動(5-25点)13.04、妻への実質的支援行動(5-25点)12.36であった(図3参照)。子どもの身

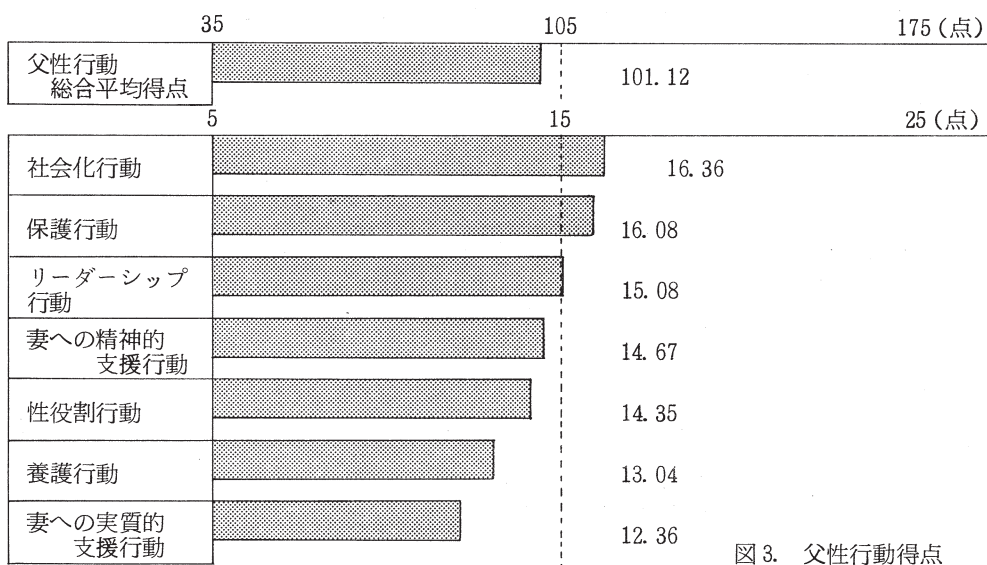


図3. 父性行動得点

の周りの世話に関する養護行動や家事を手伝うなど妻への実質的支援行動の平均得点は低く、「社会化ー保護ーリーダーシップ」を中心とした父性行動をとっているといえる。尾形は(1989, 1990)、専業主婦と共働き家庭の両親を対象に、育児参加度について比較を行い、共働き家庭の父親の方が育児参加度は高いが、父親よりも母親の方が育児参加度は高いと報告している。妻は職業を持ち、果たしている役割が変化しているにも関わらず、父親が養護や妻への実質的支援行動を十分とっていないことから、妻に負担が生じていると予測される。

#### 5) 父性行動に関する要因

父性行動に関係していると考えられる要因について、一元配置分散分析を行った結果、表1に示すように「理想とする父親像」「父親としての自己像」「平日子どもと過ごす時間」「休日子どもと過ごす時間」「平日子どもと過ごしたい時間」「休日子どもと過ごしたい時間」「平日子どもと遊ぶ時間」「休日子どもと遊ぶ時間」、「夫婦関係」により、父性行動総得点に有意な差が認められた( $p < 0.00$ )。以下、要因にそって結果を述べ考察する。

表1. 父性行動総得点と要因の関係

	要 因	父性行動総得点
父 親 準 に 備 な 性	父親の年齢	—
	生育歴における子どもとの関わり経験	—
	子どもとの最初の対面	—
子 ど も の 特 性	子どもの年齢	—
	子どもの性別	—
	子どもの出生順位	—
	子どもの数	—
家 構 造	妻の年齢	—
	同居の有無	—
	夫婦関係	* $p < 0.00$
父 親 像	自分の父親に対して抱いている父親像	—
	理想とする父親像	* $p < 0.00$
	妻が期待していると思う父親像	—
	父親としての自己像	* $p < 0.00$
生 活 時 間	平日子どもと一緒に過ごす時間	* $p < 0.00$
	休日子どもと一緒に過ごす時間	* $p < 0.00$
	平日子どもと遊ぶ時間	* $p < 0.00$
	休日子どもと遊ぶ時間	* $p < 0.00$
	平日子どもと一緒に過ごしたい時間	* $p < 0.00$
	休日子どもと一緒に過ごしたい時間	* $p < 0.00$
	仕事の時間帯	—
	仕事の休日	—
	妻の仕事の時間帯	—
	妻の仕事の休日	—

① 子どもの特性

“子どもの年齢”“性別”“出生順位”“子どもの数”については、父性行動総得点に有意な差は認められなかった。

② 家族構造

“妻の年齢”“同居の有無”については、父性行動総得点に有意な差は認められなかった。“夫婦関係”については、子どもが生まれて夫婦のきずなが“深まった”107.99、“かわらない”98.52、“距離ができた”79.67であり、“深まった”群ほど、父性行動の得点が有意に高値を示していた( $p < 0.00$ )。このことから、父性行動に関する援助をする場合、夫婦関係を調整していくことの重要性が示唆された。

③ 生活時間

“平日子どもと一緒に過ごす時間”については、“3時間以上”109.70“2時間以上3時間未満”102.32“1時間以上2時間未満”100.23“1時間未満”94.74“なし”87.76で、一緒に過ごす時間が長いほど有為に父性行動総得点が高かった( $p < 0.00$ )。“休日子どもと一緒に過ごす時間”“平日子どもと遊ぶ時間”“休日子どもと遊ぶ時間”“平日子どもと一緒に過ごしたい時間”“休日子どもと一緒に過ごしたい時間”についても同様に時間が長いほど父性行動総得点が有意に高値を示していた。“仕事の時間帯”“仕事の休日”“妻の仕事の時間帯”“妻の仕事の休日”については、父性行動総得点に有意な差は認められなかった。これらのことから、父性行動は、父親、および母親の仕事の時間帯や休日によるというよりもむしろ、いろいろな状況の中で実際に子どもと過ごす時間、子どもと遊ぶ時間と関係していると考えられる。

④ 父親になる準備性

“父親の年齢”“父親の生育歴における子どもとの関わり経験”“子どもとの最初の対面”“子どもの年齢”“性別”“出生順位”“子どもの数”については、父性行動総得点に有意な差は認められなかった。新道らは、乳児の両親を対象に研究をおこない、両親の生育歴における子どもとの関わり経験が子どもとの愛着を形成していくうえで重要であると論じている。しかし、本研究結果からは、父親の生育歴における子どもとの関わり経験の有無と父性行動との間には、有意な関係が認められなかった。また、Greenberg(1974)は、誕生後の父子の接触をできるだけ早期に長く持つことは、父が子どもに投入する上で重要であり、特に生後1時間の接触が重要であると論じている。本研究で、立会い分娩を含め生後1時間以内に対面した父親群と、12時間以内群、24時間以内群、3日以内群、それ以後の群にわけて分析し有意差が認められなかったのは、生後3～6年が経過しているためではないかと考えられるが、今後さらに検討していく必要がある。

#### ⑤ 父親像

“理想とする父親像”については、「抱擁タイプ」が最も得点が高く106.34、次いで「子どもの意志尊重タイプ」101.13、「友達タイプ」98.55、「傲慢タイプ」96.88、「威厳タイプ」87.17、「疎遠タイプ」87.00であった( $p < 0.00$ )。“父親としての自己像”については、「抱擁タイプ」が115.33、「友達タイプ」で105.17、「子どもの意志尊重タイプ」103.35、「威厳タイプ」99.00、「傲慢タイプ」97.86、「疎遠タイプ」93.49であった( $p < 0.00$ )。このように、父親がどのような“理想とする父親像”“自分に対する父親像”を抱いているかにより父性行動は影響をうけていることがわかる。“自分の父親に対して抱いている父親像”“妻から期待されていると思う父親像”については、父性行動総得点に有意な差は認められなかった。森岡らは、役割取得のプロセスについて、個人は、自分の担っている役割について自分なりの考えを持っている(役割認知)が、他者から「このようにあってほしい」という期待がかけられた場合、それを個人は認知し、自分の役割認知にそいながら再度自分の役割を捉えなおし、そして役割を遂行するというモデルを提唱している。しかし、今回の結果からは、父親は、自分のとる父性行動を変容させるほど、妻から期待されていると思う父親像に影響をうけていなかった。このことから、あくまでも自分の“理想とする父親像”“父親としての自己像”に影響をうけながら父性行動をとっている父親の姿が伺える。

#### Ⅳ おわりに

本研究は、①父親が父性行動をどの程度行っているのかを明らかにする②父性行動に影響している要因を明らかにすることを目的として、高知市内の保育所に通園している3～6歳の子どもの持つ共働き家庭の父親を対象に、質問紙法により調査を行った。その結果、父親の持っている父性行動の実態と、父性行動に関係している要因として“理想とする父親像”“父親としての自己像”“平日子どもと過ごす時間”“休日子どもと過ごす時間”“平日子どもと過ごしたい時間”“休日子どもと過ごしたい時間”“平日子どもと遊ぶ時間”“休日子どもと遊ぶ時間”“夫婦関係”が抽出された。今後は、研究結果に基づき、父性行動に関する要因の分析枠組みを整理し、研究を重ねていきたいと考える。